

【早期対象関係における‘皮膚’の再評価】

ジュディス・ジャックソン&エレアノール・ノーウエルズ
(Judith Jackson & Eleanor Nowers)

私(J. J.)は、エスタ・ビックの乳幼児観察セミナーに参加していた2年間で大いに意義ある時であったと今も懐かしく振り返ります。当時彼女は‘皮膚’という概念に没頭しておりました。幼子がしっかりと抱きかかえられず、心身ともにバラバラで、身を竦ませて震えているといった耐え難い状態にあって、心底味わっているところの木っ端微塵に解体されるやら液化して溶けて滅してしまうといったこどもの恐怖感について、実に鮮やかに詩情の漂う雰囲気、彼女は縷々物語っていたものです。ピオン(1962b)が‘名付けられぬ恐怖 nameless dread’と呼ぶところのものを彼女ほど文字通りにその余韻を伝えられる人はまずいなかろうと私には思われます。セミナーグループのメンバーは、数多のこどもの個々のドラマが展開するさまを彼女が詳細に叙述し分析してゆくのを拝聴しながら大いに心を奪われたものであります。彼女の無比ともいふべき理解力に圧倒され、幼子の痛苦と無力感の熾烈さを聞きながら、殆ど涙を禁じ得ない気分になるのです。そしてわれわれが得てして母親の欠点やら問題点をあまりにも安易に批判しがちであることに内心大いに恥ずかしく思われ、些かしゅんとなったものであります。われわれの手許に遺された彼女の幾つかの論文は、乳幼児観察というフィールドを開拓した、その秀でた直観力及び創造的な思考を余す所無く示すのにはささやか過ぎることが惜しまれます。

さて、これからわれわれはそのような観察事例の一つを通して、そこに繰り広げられるドラマそしてその迫真性を例証したいと思います。それですでここで、ビックのオリジナルで、非常に濃縮された、複雑ともいえる‘プライマリーな皮膚機能’についての1968年の論文を取り上げ、そこに著わされた思考を幾つか辿ってみることから始めることに致しましょう。

ここでまず論じられるべき「テーゼ」とは、そのプリミティブな形態においてはパーソナリティの部分部分にはまったくのところそれらを‘繋げ合わせる力 binding force’が無いと感じられているということであり、従って、それらが一つの纏まりとしてしっかりと抱えられるためには、まずは受け身的にですが、境界(線)boundaryとしての‘皮膚’が機能することによって辛うじてそのように経験されることになるわけであり、しかしこうした自己の部分なるものをコンティンする内的機能といえますのは、まず最初にはそうした機能を施してくれていると体験されたところの外的対象が摂り入れられることに拠るといえましょう。その後、この対象の機能との同一化 identification が未統合な状態に取って代わり、そして内なるスペース及び外なるスペースといった空想 fantasy が生じるわけなのです。そうであってこそ初めて、メラニー・クラインが述べているように、自己及び対象のプライマル(一次的)な分離及び理想化といった機能が作動し得るものといえましょう。コンティンする機能 containing function が摂り込まれるまでは自己の内なるスペースという概念は発生しようがありません。従って、内在化 introjection は、すなわち内なるスペースにおける‘対象のコンストラクション construction

of an object'ということになります、損なわれたままであります。そうした内在化が機能不全でも、必然的に「投影同一化 projective identification」の機能は尚も引き続き持続してまいりますから、それに伴うあらゆるアイデンティティの混乱はよりいっそう顕著になるということになります。(Bick, E. 1968) [訳註;【早期対象の関係における‘皮膚’の体験】(1968) p.1 を参照のこと。]

このようにして、コンティンしてくれる対象へのニーズは、死に物狂いともいえるような対象の探索へと子どもを駆り立てるわけであります。

光、声、匂い、もしくは他の感覚的な何かといったそれらは、子どもの注意を捉えて離さず、そしてじっくり玩味されることで、少なくとも一時的にはバラバラなパーソナリティを一つに抱えてくれるといえましょう。その最適ともいえる対象は口の中の乳首でありまして、そしてそれと一緒に、抱っこし話し掛けてくれる、馴染みのある匂いを持つところの母親でありましょう。(同. 1968)

ビックは、クラインの流れを汲んで、母親のコンティンする機能を取り入れることの重要性を強調しております。これを通して幼子は、それ自らの‘皮膚’において自らを一つのものとして抱えもつことができるようになるわけであります。たとえ外界に抱えてくれる対象が不在であったとしても、それで自らが溶解しグジャグジャになったり、バラバラに崩壊することもなしに…。ここには実に重要極まりない二重に強調される意味が含まれております。一つは、皮膚が内側と外側との境界、つまり自己と対象の境界としてある身体的な器官であって、文字通り身体の部分部分を一つに抱えるものであるということ。それから皮膚は、‘母親のアルファ機能及びコンティンする心’が象徴された比喩(メタファー)であるということです(ピオン、1962a)。因みに、フロイト((1923)が著わしたところの自我とは、まず第一に‘身体自我’であったわけです。

ビックは、幼子がこのようなプロセスのうまく機能していない状況に直面したとき、その生存を賭し、また崩壊を回避せんとしていかにさまざまな手立てを尽くすかを詳述しております。そして彼女は「二次的皮膚 second skin」という概念を導入したのであります。それは、擬似的な自立の一時的妥協を提供するところの防衛機制といえます。言うなれば、筋肉的もしくは知的な‘甲羅’ということになりましょう。それは自給的なコンティンメントを提供し、外的対象への必要性を否認するわけであります。この二次的皮膚は脆弱な内的芯を覆い隠しており、本来ならば母親の「一時的皮膚」がその身体的かつ心理的な特性とともに取り込まれるはずですから、誤った発達ともいえるわけであります。

ビックのいうところの赤ちゃんの内なる世界において、母親はどのように経験されているのでしょうか？ 幼子は母親の様相をどのように原始的投影及び摂り入れ同一視するものなのか、それらの特徴についてわれわれははたして仮説を設けることが出来るものでしょうか？これから述べますところの事例から、幼子が己れの実際の皮膚の表面上に文字通りその早期の体験を刻み込んでいる実態が覗われます。そして投影同一化を通して、その彼自身の皮膚の操作が、母親のこどもの興奮を煽り、欲求不

満に陥らせ、そして圧倒させるといった側面と混ざり合っ大いに混迷を来たしているとわれわれは考えます。さらには、ここでの皮膚への倒錯的かつ性愛化された関係性の発達、幼子が母親に起因するところの‘言葉の混乱’（フェレンツィ,1933）を経験するのを防御し、かつ克服するために奮闘した結果と見做していいのではないか、そうした点もこれから大いに検討してみたいと思っております。

乳児観察例;ピーター

ピーターは誕生当初から、観察者の眼には、いかにも抱えられているように見えるけれども、それも型破りなありようで、といった印象がありました。新生児の頃、彼は何も覆いもなしにどこにでも寝かせられていましたし、時折母親の膝の上に乗っている時でも、彼は母親のからだからは距離があり、懐の内にしっかりと抱え込まれるということはないわけです。ただ母親は熱烈に彼の顔を注視しているばかりなのでした。彼の身体の位置はしばしば不安定で、観察者は彼が落ちこはしないかと恐れたものです。しかし母親の声かけやら注視が絶えずありましたので、それでどうにか充分といった感じで、彼は一見して満足そうに見えたのです。彼は母親がひっきりなしにお喋りしている際に、ほんのわずかに声を漏らすことができました。恰もそれに同調しているかのように。そして彼女が一時的に部屋から立ち退いた場合には、ちょっと甲高い、せがむような声を立て、いかにもこの抱えてくれる、揺する声の不在に抗議しているようでありました。訪問の最初の頃、ピーターがおっぱいを欲しがらる様子はまるで覗われず、そして母親はむしろ言語的もしくは視覚的なつながりを利用して、彼のおっぱいを欲しがらるのを抑制しているのではないかと観察者は訝ります。幾度も母親から、授乳は今さっき済ませるところだとか、もしくはもうちょっと後でとか、夜中じゅうずうと飲ませていたとか、言い訳を聞かされるわけなのでした。観察者が最初に授乳を観察できたのは、ようやく6回目の訪問時であります。彼女もまた、母親のお喋りに満足しがちで、この間の観察は赤ちゃんというよりも母親に付き合うことに終始したといえます。

※観察6週目；

6回目に私が訪問したとき、母親はピーターに授乳しておりました。彼女は彼を抱き上げ、彼を膝の上に彼女に向かい合う恰好で座らせます。彼を彼女の眼そして声に夢中にさせております。彼は、機敏な顔付きで、不思議そうな、むしろ喜んでいるふうな表情を浮かべており、母親を眺めながら彼女への反応として微笑を浮かべていました。しばらくしてピーターは何やら是非にもと言った感じで、繰り返し音を立てます。いかにも何か欲しがっているのは明らかです。母親は彼が<おっぱいを欲しがっているんだわ>とコメントしましたが、その動きは見せず、私にお喋りを続けました。ついに彼女は彼を膝の上に横倒しに抱えます。すぐさま彼は切迫したふうな音を出し、頭を彼女の方へ向けて、興奮した趣きでからだを落ち着かなく動かします。母親は声をあげて笑い、<この位置が何を意味するのか知ってるのよ>と言います。彼女は授乳するのをためらっているかのようでしたが、やがてジャンパーの裾をまくしあげます。するとピーターは勢いよく手を伸ばし、おっぱいの乳首を小突きます。それがため母親のからだが一瞬ちょっと怯んだようになります。彼女は彼をからだに寄せ、おっぱいを

しっかりと掴むことができるようにします。それから彼は静かになり、もごもご動くことは止め、しばらくの間は落ち着いて飲み続けていました。私は彼のゴクゴク勢いよく飲む音が聞えます。彼の頭だけが彼女の方に向いており、体はそうではありません。彼の腕はどちらも前方に持ち上がったままです。母親は、＜突然もう充分だって決めるみたいで、それで頭を後ろへと反り返って、眠ってしまうのよ＞と言います。眠ったかどうかは腕で解るんだとか。つまり眠りに落ちるときは徐々に手が下に下りてゆくというわけです。これが実際に起きたことです。彼のおっぱいから離れた顔は、もう充分満足と言った表情を浮かべて、クチャクチャになっておりました。

ピーターがここで力任せにおっぱいを小突いたのは、観察者には、手のこぶしは希求するところのおっぱいに届かないもどかしさゆえに、まさにその飢えた口の代わりであったのではないかと思われました。つまりは、彼の口/手のこぶしは届かない乳首へと敢えて突っ込んでゆかねばならなかったということのようです。おっぱいは徐々にミルクの出が悪くなりました。それが赤ちゃんを焦らし、そして欲求不満に陥らせて、赤ちゃんの最初の暴力そしてその後もう充分といった感じで顔を背けるといったことを誘発していたように思われます。彼の飲み終えた後にすぐさま眠りに就くのがメンタルな意味での拒絶を伝えていたとしたら、身体的な拒絶のジェスチャーとして彼は頭をのけぞらせていたとっていいでしょう。

次の4週間、引き続き授乳はいつも手間取って遅れがちでした。母親は、彼とおっぱいとの間に彼女自身やら、声そして注視を挟ませるといった戦略をあれやこれや用いているふうなものでした。観察者に対しての言い訳に、彼がなぜ授乳しなくていいのかという理由を、際限もなし彼女は言い募っています。お腹がもういっぱいはずだとか、ちょっと具合が悪いとか、ほんとうのところ全然お腹はすいてないんだとか…。この後すぐしばらくして、彼が欲しがると抑えるのにもっと別の能動的な対策が必要とされてゆきます。下記の観察では、ピーターは8週目ですが、彼女の声やら眼はもはやおっぱいを欲しがってぐずる彼の声を止めることはできませんでした。

※観察8週目：

数分ほど間をおいてから母親は、今やひどく落ち着きなくむずかるピーターを抱きあげて、＜飛行機してみようか＞と誘いかけます。そして両腕を伸ばし、彼のからだを半分持ち上げる恰好で勢いよく彼を振り回します。それからそのまま玄関口へと移動してゆきます。ピーターはむずかる声を止め、静まり、硬い表情のままです。そこで彼女は肩に彼を凭れかけさせ、階段をのぼってゆきました。

玄関口付近での‘飛行機ごっこ’遊びは、彼の頭を玄関の扉にぶつけないように母親は的確な動作をしなくてはならなかったわけです。そして彼女は、彼の一目して極度に怯え、身を竦ませている様子に気づき、それには敢えて朗らかに彼を危険ぎりぎりにまで高く持ちあげることで反応しております。或時、授乳をお預けにするという駆け引きがしばらく続いたあとのことですが、ピーターが突然怒りと欲求不満とでかなきり声を張り上げ始めたのです。すると珍しくも、それはいつもの彼女らしくないことです。が、面喰らったふうに狼狽し、母親は＜もうちょっと待ってられるでしょ…＞と怒ったふうに言います。

すぐさま、他の彼のニーズもまたお預けを食らうことがあるということが明らかとなってまいります。例えば睡眠であります。日中ピーターはあちこち場所を変えて昼寝を続けます。肘掛椅子の上、おしめを変え、そして親の寝室のベッドなど。からだを覆うための何も掛けるものなしに…。それもほんのしばらくの間だけのことで、眠りは途中で遮られるわけなのでした。時折彼が彼女の脚の上にバランスを保って横にされていますとき、彼女は突如からだの位置を変え、彼を起こしてしまうのです。それは恰も彼女に彼が完全に依存しているさまを誇示しているかのようなのでした。夜になって、彼女はまた自分が就寝の準備が出来ていないところで彼をベッドに入れます。そして落ち着き払って彼の泣き声が続くのに耐え、どうにかやっと眠ったわねと思った頃に二階へとあがってゆくということでした。彼を彼の好むとおりに食べさせたり、もしくは眠らせるといったことができませんし、彼女の母親としての戦術は矛盾もしており、そして気まぐれとっていいでしょう。日中は過剰にかまいすぎ、夜になると放ったらかしといった具合で、彼女は満足させることそして欲求不満にさせることの間を絶え間なくぶれていました。そうしたわけで彼女が赤ちゃんの世界においては中心であるということが確実に成ってゆくばかりで、その逆では決してなかったわけです。しかしながら彼女の初めての赤ちゃんでありましたから、彼に対しての情愛は深く、始終彼から離れがたい思いでいたというわけで、彼女流に自分がごく普通の献身的な母親であることにはまるで疑っておりません。そして観察者は、この母親が自分で何をしているのかさっぱり解っていないのだというふうには思わざるを得ないのでした。

彼はここに至って‘皮膚’を、彼そして母親のいずれもが決して心に思い浮かべることのできないフィリングを記憶に留め、そして表出するための‘場所’として活用せんとし始めるのが観察されました。

※観察10週目；

母親が彼を肩越しに凭れかからせ、ゲップをさせます。彼は顔を彼女の肩に押し付け、ゴリゴリと幾らか半狂乱な体でこすり付けます。両腕を振り回し、脚を蹴っております。これが実に奇妙に思われたのは、彼が顔をあまりに強くこすするため、その顔が極端に赤味がかって、しかも痛そうに見えたからであります。母親は、彼の頭の後ろのごく小さいながらも髪の毛が纏れている箇所を私に指し示します。それは、夜仰向けに寝ているときにシーツに彼が頭をしきりにこすりつけるものだから出来たんだという説明でした。

ピーターはもう充分だというほどに授乳されることはありませんでした。ゲップをし終えたあと、彼は母親の中へ身をこすりつけながら潜り込もうとしているかのようにあり、また彼女のからだをゴリゴリこすりながら恰もそれを撃退せんとしているかのようでもありました。そこにはいかにも何が良いものか悪いものか、取り入れたいと願うものそして排斥したいと願うもの、そして希求するものそして攻撃したいものといったものがひどく混迷 confusion を来たしており、それもますます募ってゆくかのように見受けられました。つまりは、自己と対象との混乱であります。おそらく母親が信じたように、発疹のせいで頻りに顔をこすりつけるともいえませんが、観察から覗くところでは、その逆、即ちこすりつけるせいで発疹ができるともいえるわけなのです。

10週目以降18週目迄の観察からは、ピーターが皮膚にますます妙に‘イラつき’を見せ始めてゆくのが覗われます。それとは対照的にその顔の表情は、機敏で沈着ともいえるものでしたが・・・彼は両足をこすり合わせることをしています。もしくは足が置かれたところに何か触れるものがあれば、それを頻りにこすることもしております。彼は耳そして顔の顎の辺りをも引っ掻きます。それで今やそこら辺りが赤くなって、見るからに痛そうな斑点ができていました。彼の頭の後ろ側の禿げた部分は広がっており、そしてその頭皮の他の箇所にも赤い点々模様があちこちにできていました。母親はおっぱいによる授乳を制限することに決め、その代わりに彼に哺乳瓶でミルクを与えることにします。しかし彼がひっきりなしに哺乳瓶を拒むので、彼女は固形食を与えます。でも彼はその母親の努力をもまた拒んだわけで、それで食事が気の重たい、憂うつな、執拗に延々と続くバトルと化していったわけなのです。観察者にとって、ピーターがおっぱいを飲みたがっているのに貰えないでいるのを目にすることはひどく苦痛でありました。そしてそれから間もなく、ピーターはおっぱいの代わりにどれをも拒んで退けただけではなく、母親に対して同様な対応をするようになってゆきました。

※観察18週目；

母親がピーターをお座りさせる恰好で抱き上げ、その真上からからだを屈んで、彼をその腕に抱えようとします。ところが彼の反応は、両手でその彼女を必死で払いのけようとしたのです。その後で彼は、手を耳に置き、イラついたふうに掻きむしっております。

2,3分の間、彼は不機嫌で怒ったふうにして頭を彼女の肩にこすりつけて、彼女を頭でゴリゴリ押しします。しかしまた、彼の顔がむずがゆいようなのです。

※観察5ヶ月目；

彼は母親の膝の上にはいました。どうやらその母親のジャンパーの上からおっぱいをまさぐっているようでした。(観察者は、彼がお腹すいていて、それでおっぱいを欲しがっていると考えます。)母親は彼をベビーサークルに入れて、お茶の支度に取り掛かります。彼はそれにチラッと気を奪われていましたが、それからちょっとばかりパニックになったみたいに、もしくはひどく焦れたふうでもありましたが、手をバタバタと振り回し、それでぶらさがっていた玩具を盲滅法に叩き始めました。まるで叩きのめすみたいに・・・彼はやがて静まり、再びそれらと遊び始めます。それから再び気分をイラつかせ、玩具に当り散らします。これが何度か繰り返されました。それは恰も、なんとかそれで自分自身のコントロールを、もしくは他の何ものかを借りて、なんとか維持しているみたいなのでした。またパニック寸前にありながら、でもどうにか自己回復を試み、危機をコントロール下に収めたみたいでもありました。彼は自分以外そしてベビーサークルの外にある如何なるものもまるで目に入らないようすです。また彼は足の爪先を持ち上げては頻りに片側の足にこすり合わせたりもしておりました。

ピーターは、玩具を‘迫害的なおっぱい’のように扱ってでもいるみたいでした。それらに手を伸ばして掴もうとしながら、彼はそれらを希求しつつ、また同時にそれらを追い払わんとしているといった具合な

のでした。これは彼が自分の足を自分のからだにこすりつけて使うさまにも反映してもおり、ここに実に厄介なジレンマが覗われます。この後の数回の観察の際、彼は母親から身を竦ませてのけぞることをしております。彼女の顔を見ることを拒み、もしくは彼女が彼を宥めすかそうとする努力に対して反応することも拒みます。その一方で彼は自分のからだを頻りに搔いていました。しかしながら、彼は時折、与えられずにいるおっぱいに手を伸ばそうとしたり、彼女のジャージの上からそれを手で掴みとろうとするのでした。そしてこうした時には彼の顔は頬をふくらませ赤くなり、いくらかイラつき、それは希求する心と憎悪する心とのいずれもが伝わってきました。かつて彼と母親を繋げていたところの互いの凝視は、今や彼によって彼女を拒絶することに使われているといえます。彼は彼女をジッと見つめるのですが、恰も彼女がそこに存在しないかのような目付きなのです。もしくは目を遠くへと逸らしてしまうわけです。観察者は、母親も赤ちゃんも互いに圧制者となって支配を巡ってのバトルを繰り返していると考えました。どちらものが占有的であり、嫉妬深く、そして痛々しくも互いを拒絶し合っているというわけでありませぬ。このような状況に嵌ったまま、どうやらピーターは、母親というのが分離した存在であるとか、もしくはその不在といった概念を少しも抱くに至っていないようであります。すべての対象物は(上記した玩具がそうですが)まるっきりおっぱいのように取り扱われていたといえましょう。

これらの観察は Mrs.ピックの‘皮膚’に関する考えを思い起こさせます。ピオンの‘アルファ機能の母親’といった概念と同様に…。この幼子は、その混乱を極めた経験をプロセス化し、そこに何らかの意味を与え、そしてそれを彼が取り入れることができるような外界の‘コンテナcontainer’といったいかなる感覚をも持ち合わせていないようであります。彼は目覚めさせられ、かつ刺激されるわけですが、それは単に欲求不満に陥らせられるためだけなのです。彼は自分がそれを期待していないときには与えられ、満足を得ます。そしてこの予測不能で気まぐれな対象をコントロールする術を持たないわけです。こうした時、彼の顔の表情は独特に無表情となります。生真面目で、じっと注意を怠らないといった用心深い印象です。そうして落ち着き払った外見からは、母親が次に何をしでかしてくるのかを待ち構えているといった、彼の内的な状態を反映しているように見られました。微笑は滅多に見られることはありません。ごく普通の喜びになる前にひよいとその微笑も掻き消されてしまうといった具合でした。いくらか狂乱の発作を起こすときは別として、彼は概してからだを固くして、じっとしていることが多かったのです。これと著しく対照的なのは、皮膚の状態がますます不安定となり、見るからに赤味を帯び、色艶が悪く、発疹がからだのあちこちに出始めていたことです。それは、彼が6ヶ月目、初めて母親から分離を体験した時にその極限状態に至ったといえます。母親はどうしても実家に里帰りしなくてはならない用事ができ、それで友人宅に一日彼を預けたわけなのです。観察者はその翌日に彼を訪れ、そこで彼の外貌の凄まじさを目の辺りにし、驚愕したのであります。

※観察6ヶ月目；

彼は恰もひどい火傷を負ったようなのでした。大きくて生々しい、赤味があった2本のミミズバシみたいなのが眼の下の部分、両頬の上部を覆っており、それは耳の方にも伸びていて、また口の両側へも三日月の形でそれは拡がっておりました。顔の外の領域は赤いシミで覆われ、さらに小さな赤い

斑点がポツポツ頭皮にまで伸びておりました。ところが彼の表情はそうした外見とは驚くほど対照的でありました。彼は大きく微笑を浮かべ、人馴れした感じで、まったくのところ上機嫌なのでした。

彼の外見が両親（及び観察者）に与えたショックは、ピーター自身がその前日に何らかのショックを経験したであろうと考える上での唯一の証拠です。彼の皮膚はまさに‘怒りの覆い an envelope of rage’ (Anzieu, 1989) といった感じでした。こうした母親からの分離への極端な心身症的反応からして、ピーターが彼自身‘コンティンする皮膚’という感覚をまるで持ち合わせていないということが示されているように思われます。分離はそれ自身彼ら相互の皮膚が切り裂かれてしまったことを示す‘損傷’を表していたからです(Pines, 1980)（※原註1）。母親は観察者に、ピーターが友人宅で過ごしていた間どんなによい子であったか、彼女から離れていても全然大丈夫といった、その我慢強さを誇らしく思うと語っております。それはまた改めて、ピーターが意識的に母親との分離を経験することもなく、或いは母親の不在をも意識したりしないこと、そしてすべてが彼の皮膚に包摂されていることに繋がり、即ち彼の空想下で彼の皮膚はまた母親のそれでもあるといったことが想定されるのであります。

翌月になりますと、ピーターはますます彼自身の皮膚と皮下脂肪とを操作し続け、そうして躍起になって生存する手段をものにするべく奮闘していたということが覗われます。彼の体重の増加が止まりました。やがてそれに気づき驚いたヘルス・ビジターの介入がこの時点であったわけです。母親は、自らの母親としての能力が疑問視されたと憤慨しておりました。そして彼女は憤然としてこの状況について、それは他の子どもらは意地汚く無暗に食べ物を詰め込むのに、自分の子どもは繊細で、欲しいだけしか食べないからだといったふうに言い訳をしております。観察からは、それとはまるで違った別の話が浮上してまいります。何度となく母親は授乳もしくは離乳食を中断し、ピーターとその与えられているものとの間に割り込んで邪魔立てをすることがありました。彼女は哺乳瓶もしくはスプーンを取り上げ、そして代わりに戯れに鼻をこするといったことをしたり、‘共感的に’もう充分お腹いっぱいだということに決めたり、乳首に栓がしてあって、その栓を抜くのを忘れていないことに気づいたり、彼の固形食を彼女自身が口に入れてしまうといったこと。これらすべてにおいて、しかしながら、彼女は自分自身こそが息子の心底求めている対象であると誇示する態度を崩そうとはしません。こうした状況が続きますと、ピーターの身になれば、飢えを示すサインを表すことがごくごく控えになってゆく外なかったということになります。そんなふうでしたから、明らかに母親の思惑どおりといった成り行きになってゆきました。しかしながら、彼の餓死することへの共謀的な無関心は、その一方でますます皮膚への暴力的な攻撃を募らせてゆくばかりでしたから、大いに矛盾があったといえるわけです。それは早期の分裂メカニズムの証拠を示すものであったといえましょう。

※観察7ヶ月目；

彼はお腹辺りを爪で引っ搔いております。手の指先で皮膚をつまみ上げて、それを離すまえに手のうちで捻り、それを繰り返すのでした。彼は落ち着きなくバタバタと動き、足を蹴り、母親を見つめては微笑し、そして続けてお腹の辺りを引っ搔き、その辺りの脂肪分を手でひねるといったふうでした。

※観察8ヶ月目；

ピーターはペニスを両手で掴み取り、それをギュッとひねり、それから指を使って真上へと振り上げ、それから睾丸へ向けて振り曲げます。それは見ていてとても痛そうなのですが、彼の顔の表情は依然として無表情のままです。彼はペニスの先っぽを掴み取り、それを捻りましたので、その部分が赤くなっています。それと隆起したむらのあるミミズバレが彼のお腹の辺りまで伸びてゆきます。観察者は彼がしていることにもはや見るに耐えない気分になったため、彼にぬいぐるみを与えてみたのですが、彼は自分のしていることに没頭しきっており、ぬいぐるみには一瞥もくれません。

ピーターは皮膚の表面を撫でこすったり引っ掻いたりすることは稀で、むしろ皮膚とその下の脂肪を掴んでグイと引っ張り、抓るやら、爪を立てるやら、引っ掻くやら、捻じ曲げるやらをします。彼の手が自分のからだに向け、こうした苛酷な動きをしながらも、対照的に顔には微笑を浮かべ、もしくはまったくの無表情で、大きく眼を見開いているばかりといったふうで、それはなんとも異様としか形容できないものでした。ちょっと見には赤ちゃんが自らにもたらしめているところの感覚は苦痛としか考えられませんが、事実時には見るに耐えないといった感じなのでした。しかしピーターはその表情から、まったく自己陶醉していて、自己愛的な快樂すらも伝わってまいります。そして、いかにも意図的に攻撃済みのヒリヒリする箇所から未だ傷跡のない箇所へと移ってゆく様子が覗われました。言い換えれば、皮膚の領域が彼の攻撃に対して感覚的に麻痺して鈍くなればなるほど、彼は目一杯に感覚を増幅させてゆけるといったふうで、恰もこの倒錯的な感覚が一つのコンテインメントのかたちを彼にもたらししていたといえそうです。時折彼はこんなふうで、心身がバラバラに崩壊するといった怖れを感じている状況などで最も切迫したふうで耽溺していたわけなのであります。例えば、風呂からあがって裸でいるときとか、母親が風呂に湯を張るのに部屋から出てゆき、その間一人で放置されていたりするときであります。

皮下脂肪に爪を立てることで、ピーターは今や皮膚よりもっと深い感覚 sensation を覚醒させていたに違いありません。そこでわれわれは、彼が自ら身体の‘コンテナ-container’であり、また同時に‘コンテインド contained’でもあるといった身体的経験を作り出しているではなかろうかと考えたのです。すなわちそれというのも、母親との間の全身体的な混乱そのものが表象されているわけですが・・・シーガルはその論文【Notes on Symbol Formation】(1957)の中で、<早期のシンボルというのは・・・自我によってシンボルもしくはその代替物として感じられるのではなく、オリジナルな対象そのものなのであります> (p.164)と語っております。ピーター自自身の皮膚と皮下脂肪とは母親のそれとの‘象徴的等価物 a symbolic equation’であろうかと思われまます。このことはピーターの心的発達に関連して申しますと、彼の真正なる象徴化段階への発達は不可能だということを意味します。言い換えれば、抑うつポジションとの折り合いを付けることすらも困難でしょうし、それに伴うところの喪失の恐れやら罪悪感、そして徐々に母親を自分とは異なる、それ自身の身体と心とが備わった一人の人として認めることもひじょうに困難となるということなのであります。

母親との暴力的な投影同一化の作用はまた、母親の彼に対して振舞うところの行動のありようを

彼自身即座にそっくり真似るありようにも覗われます。投影同一化を通して彼は、いふならば彼女という存在を摂り込み、その内側に宿らせたといえましょう。事態が込み入っていて厄介なのは、母親の移り気な焦らし、剥奪、そして加虐的な行為が彼女の紛れもない献身と同時発生的であるということとして、それはピーターについても同じわけで、彼は現実の対象を、それに彼自身の身体のみで攻撃しながらも、それを象徴的等価物として活用することで、攻撃から免れさせているということになるわけであり、それぞれが虐待を互いに課しながら、それでもいずれものがそれら‘皮膚の深いところで skin-deep’ 相互的な安穩と満足を維持しているといったところでありましょう。

皮膚の機能 (The function of the skin)

この赤ちゃんが皮膚を利用していると思われるやりかたはもう十分に複雑といえましょう。まず第一に、それは彼の外なる環境への反応を表出するところの‘場所 location’であります。それは赤味を帯びるやら青ざんだりもしますし、もしくは斑点やら湿疹ができたりもいたします。

2点目としては、それは内なる心的反応が投影されるスクリーンとして行使されているといえましょう。例えば、母親から引き離されたときの劇的な皮膚反応がそうです。前言語的で、かつ明らかに意識的には満足げに見える赤ちゃんである彼が、その内なる心的葛藤を表していると思われるのは皮膚に限定されております。その皮膚がどう見ても衝撃的としか見えない様相を呈しているわけです。それは早期の過剰な分裂 early massive splitting の表れと見做していいでしょう。つまりそこでは、心身がまったくの2つの異なった心的状態を露呈しているわけであり、

3点目ですが、これまでわれわれは彼にとって皮膚をさまざまにいじることは‘コンテインメント’の自己性愛化された感触がもたらされることを述べてまいりましたが、皮下脂肪をいじることにしても同じであり、それで‘コンティンされたもの’の感触がもたらされるということであろうと考えられます。

4点目には、投影同一化を通して、どうやら彼は彼の身体を‘象徴的等価物’として使っているといえそうです。このようにして彼は、彼自身の身体との関わりにおいて、煽りがちでかつ気まぐれでもある母親となり、そしてそれに加えて、彼の空想化された願望そして怒りを、願望されてはいるものの欲求不満に陥らせるところの、そうした同じ母親に課することができるということになりましょう。われわれは、こうしたことが彼の心の成長段階を追うにつれ、どのように展開してゆくものかと大いに好奇心を抱いたわけであり、

倒錯的な関係性 (A perverse relationship)

この幼子の観察においてこれまで認識されてきたところのありとあらゆる複雑性は、危なっかしい不安定なコンティンする母親との倒錯的な関係性の発達の方角へ向けて、劇的ともいえそうな背景を形づくってきたといえましょう。すなわちそうした母親が、投影同一化を通して、今や鮮やかにまるごとそっくり彼に反映されているというわけなのであります。加虐的な自慰行為に耽ることが、この幼子にとってのその最初の兆しとして挙げられましょう。そこには母親の彼との間の倒錯的な関係性が鏡のように反映されております。彼女は依然として息子を溺愛し続け、ごく嬉しげに息子が満足げでリラックスしているなどと語っております。彼のひもじくて死にそうな思いやら彼の情緒的苦痛にはまるで盲目であり続けました。彼女は、彼の赤味がかった傷だらけの皮膚を湿疹として見做し、それで塗り薬でもってそれをケアすることに躍起になっておりました。それを朝夕欠かさずにしていたわけです。ピーターはその柔らかな感触を忌み嫌っているかのような様子でした。そして彼はからだを落ち着きなくバタバタ動かし、母親の腕を除けようとします。それよりも自分流のいつもの乱暴ないじくり回し(しばしば自慰行為でありましたが)に耽ることをむしろしたがつたわけです。優しげに取り扱われるよりもむしろ苦痛を与えられるほうを好むといった彼の癖は、母親が穏やかに赤ちゃんを腕に抱え、あやすというよりも、‘飛行機ごっこ’やら、わざと飛び掛ってびっくりさせたり、ボールみたいにバウンドさせてみたりする、そうしたことを好むのをそのまま反映しているわけであります。さらには、彼の母親は彼のからだに対する攻撃に対して、殊にそれが性器である場合にですが、彼女も一緒になってどちらかという興奮を伴って反応しており、しばしば彼らの間には文字通りそうした‘皮膚と皮膚との触れ合い’があったわけです。特に入浴時において、ピーターが裸でいるときであります。互いに互いを引っ掻いたり、つついたり、捻ったり(噛み付いたり)の行為をすることがありました。それはまるで彼らの相互間の情熱と献身の表れといったふうではあったにしても…。そうした場合には、彼女は時として彼の性器に手を押し当てて撫でたり揺すったりもしました。もしくは彼のお尻を自分の手の上に座らせて、彼をからかって嘲りを含んだ咎めたてをするやら、卑猥な性的な愛撫のこぼれを投げかけるのであります。こうした触れ合いの間でも大概のところ赤ちゃんのニーズはまるで考慮されずに脇に置き忘れられてしまっていたといえるのであります。

※観察9ヶ月目；

彼は哺乳瓶で授乳されておりました。その手を伸ばして、母親の顔に触っています。指を母親の口の中へ入れようとして、唇を引っ張ります。彼女はそれを愉しんでいるかのように見えました。嘲りを含んだ文句を言いながら、なにやら言葉を交えて、彼に向かって顔を近づけキスしたりもしくは鼻にこすりつけたりをします。こうした戯れはピーターの側からやんわりと始まったわけですが、直に勢いづいてゆき、時には熱狂を帯び始めることとなります。彼は吸うのを止め、そして彼らは互いに戯れを続けます。哺乳瓶はどけられてしまっており、彼の母親は彼の身体やら首の辺りに頭でグイグイ押しつけますし、彼の方は手で母親を捉えようと躍起となります。それから彼の両腕は、母親に対してすると彼が裸でいるときに彼自身のからだにするのとの類似性が起こります。彼は捻り、引っ張り、押し潰し、そして切り裂かんばかりとなるのであります。

ここで、改めて、食べ物置き忘れてあります。ピーターの願望(食べ物に対する、そして彼の母親

の身体をやさしく探索すること)、ニーズ、欲求不満、そして剥奪感は、興奮しがちな、乱暴かつ感覚的な経験に包摂されてゆきます。それは彼らという二人を一緒にし、そしてそれらそのものが満足感を惹き起こすわけです(※原註2)。それにしても、彼にしてみれば真実のニーズの代替物ということではないわけですから、これは実に倒錯的といえましょう。彼の手が己れ自身の皮膚にすることそして母親のそれにすることは、愛してくれているのは間違いないとしても彼を誤解し続けるところの母親との接触を維持しながらも、ほんとうに欲しいものではない、その代替物でしか満足を得られないといった、彼の複雑極まりない心的状態がそこに凝縮されているといえそうです。

ピーターは、彼自らとの関係において、もしくは彼の母親に対しても、その自らの筋肉を使って、見るからに懸命に自分のからだに入れ込んでいるといったふうでしたが、これは他の面での動作性の発達においてどちらかというと遅滞ともいえる傾向があったのとは著しい対照を示しております。からだをごろごろ回転させるなり、這い這いしたり、もしくは母親の手の支えで立ち上がるといったことが出来てもおかしくない時期になっても、彼はただどうにかお座りを続けているばかりであり、大概のところ受け身的でかつ不活発な印象でありました。彼があまり十分に栄養を付けていなくて成長が危ぶまれている状況にあってエネルギーを浪費しないためにも彼が本能的にとった戦術を反映しているのではないかと観察者には思われました。それからさらには、それが母親の勝手な流儀で彼からの絶対的な注目を強要する、そうした彼女の意向に見合うために、ごく早期に始まっていた実に驚くほど慎重で用心深い態度の延長ではないかとも考えられました。彼自身その依存性および剥奪感をも否認しており、それで実際のところ彼は苦境に陥っていたわけですが、特にそれが食事中に明らかでありました。彼は食べ物を目の前にしてもまったく驚くほど無関心かつ無頓着で、むしろ彼の母親との間の活発な触れ合いの方に身を投げかけるということをするばかりなのでした。

父親の役割の意義(The significance of a father's role)

9ヶ月目に至る頃まで、ピーターと母親は二人だけの排他的な関係性の中で互いに没頭し切っていたといえましょう。当時ピーターの父親は、普段かなり長時間労働の日々が続いていたわけです。それが突然何週間か休職という事態となったのであります。それでこの時期、彼が絶えず家の中に居ることが彼の妻と息子が感溺し、べったり引っ付き合っていた‘皮膚’を切り裂いたということが言えそうです。そして観察者は、ピーターの中に劇的な変容 transformation を目撃したのであります。

※観察10ヶ月目：

ピーターはその視線を私を素通りし、父親の方へと投掛けておりました。大きく笑みを浮かべて、それから彼の方へとそそくさと這い寄っていったのです。私の方には眼もくれず、私の足元をさっと通り過ぎて…。父親は愛情深く彼を迎え、そして抱き上げます。ピーターは父親の腕の中でくつろいでおります。嬉しそうであり、それから私の方に視線を投げました。実際のところ父親はピーターと遊ん

でいたわけではありません。ただ二人ともそのまま一緒にくつろいでいたということになります。

ピーターと母親はこうした父親の積極的な介入によって救われたように見えました。どちらもが安堵したような解放感を漂わせていました。ピーターの動作性の発達を阻害していた見えない縛りがほどけたみたいで。そして彼は這い這いをし始め、身の周りの環境を目的と喜びを伴いながら探索し始めたのであります。彼は音を発することをあれこれ試み始めました。遊びながら一人で喃語をブツブツと言っていました。そして何よりも安堵したのは、彼の体重が増えたのです。母親は幸せそうに、それを「新しい幕開け」というふうに語っております。それはまるで彼女の心の或るレベルにおいて、ある種の極めて有害な malignant 何かが妨害しているということを悟っていたようであり、だから夫がピーターの世話を手助けしてくれることを彼女は喜んで受け入れたともいえましょう。観察者は、母親がこの時期に次の妊娠について考えを巡らし始めていたのには重要な意味があったろうと考えます。

ピーターが父親の存在を発見したことは極めて重要だったといえましょう。なぜなら父親は安全で、信頼に足り、愛情ある存在であり、母親とは別の誰かということになるわけです。ピーターは今や‘分離している’とか母親と自分とは‘違う’といったことを自覚し始めるようになっております。そして自由に動き回り探索することもできるようになってきたのです。自分のからだが皮膚全体によって纏まりのある一つであるといった感覚が今や覚醒されてきたようであります。すばやく這い這いもしますし、もしくはソファの後ろとか、カーテンもしくは壁に立てかけてあったはしごの後ろにからだを潜り込ませるなどもいたします。そうした場所では、父親の腕の中に居るときのように、彼はとても落ち着いていて、嬉しげな笑みを顔中に浮かべて周りを見渡しておりました。時には普段とても便秘がちなのですが、気張ってウンチをすることもありました。彼はからだがりっかりしてきましたし、くつろいで居心地よさそうな感じにもなってきました。自分の皮膚を倒錯した畏に陥った状態を表出するのに、また母親との内的および外的な関係性をコントロールするための主要な手段として使うのではなく、その代わりに彼はより適切な空間的な囲い spatial enclosures を用い、象徴的遊戯も可能となってゆきました。抑うつ的ポジションへの変化もいづらか歩み寄りが今後期待されそうであります。

観察者は、彼がしばしば父親を求めようとするのに気がつきました(父親の不在であるときは、事務所だね！と言ったり・・・)。しかし、どちらかというとは、自分と母親との間には或る距離を保つことの方をむしろ好んでいるといった感じが見受けられました。

※観察11ヶ月目；

彼は彼女の膝から滑り降りました。哺乳瓶を押しおけ、頭を逸らします。彼女は彼をそのままにさせます。彼はすばやく部屋の隅へと這ってゆきます。そこで彼女は彼を膝に抱きかかえ、再び哺乳瓶を与えようとします。最初彼はそれを受け入れました。その数分後彼はそれを以前よりもっと強く拒絶し、またもや再び部屋の隅へと勢いづいて這って行ったのです。

しかしながら、母親と息子は距離を保ちながら、互いに声で接触し合うことを維持しております。この‘音響的外被 sonorous envelope’ (Lecourt,1990)なるものが、彼らのそれ以降の関係性において不断に繰り返されていったのであります。

※観察12ヶ月目；

彼らの間には実に奇異な会話が交わされることがありました。ピーターが玩具を眺めていたときのことですが、いかにも無表情を装い、とぼけた感じで母親はなにやら日頃あまり耳にしない旧式の物言いで彼に話し掛けました。するとピーターはそれに応えて、いろいろと抑揚をつけて、彼女の言い回しをそっくり真似しようとします。それは彼の無邪気さをからかうといった、いかにも庇護者ぶった態度であり、ですから彼の猿真似的反応には上機嫌で、<ほらね、見たでしょ>と私に冗談っぽく、ウインクして見せんばかりなのです。彼女は彼から離れた部屋の片側に留まっていたけれども、それでも彼女の声は決して彼を一人にさせることはなかったわけであります。

時々観察者には、ピーターは母親との相互の‘会話’を、母親が彼に与えられるものを活用し、彼が成長するという課題にうまく順応してゆく間、うまく時間稼ぎをして、或る意味双方のニーズと満足感からしても互いのどちらをも宥めずかしてゆかねばならないために使っているといったふうに思われました。今や自分で忙しく動き回るようになり、かつ言語も増えてきましたから、ピーターが皮膚をもてあそぶことはかなり減ってまいりました。それでもまだ時には食べているときやら飲んでるとき、或いは入浴中などには引っ掻いたりすることもありましたけれど、皮膚は彼が1歳を迎えた頃にはほぼ全体に綺麗になっておりました。

※10歳時のピーター；

ビックは、そのオリジナルな論文において、「欠陥のある皮膚形成 the faulty skin-formation」は、その後の成長における心身の統合と組織化に概して脆弱性をもたらすということを述べております。乳幼児観察をいたしますと、ここで紹介したところの観察資料の事例をも含めてですが、その観察された幼子がおのちどのように成長していったのか、それについての興味やら懸念といったものを掻き立てられるのは必至と思われれます。赤ちゃんが大きくなるにつれ、その何がどんな児童、どんな青年、どんな成人としてそのこどもを特徴づけることになるのでしょうか？ここで10歳になったピーターについて語りましょう。彼は痩せて、物静かで、まなざしは注意深くあり、そして繊細に映りました。殊更に外向的とはいえませんが、スポーツはとても得意のようであります。優しく、でも厳しくもある父親を彼は英雄崇拜しているかのようでした。彼の言うことには素直に従っております。一方で、移り気で絶えず口うるさい母親の存在を、彼はうっとおしく感じており、時には反抗的になることがあります。やんちゃで騒々しい弟妹たちの面倒もよくみているようです。学校では、いじめられたりからかわれるといったことがありがちのことでした。彼は想像世界に自分を覆い包まってしまうことがあり、でも遊びをとおして幾らか発散させているようです。彼はためらいがちに、でも静かながらも決意を込めたふうな語りかたをします。読書に関しては学習遅滞が覗われ、それで軽度の「読字障害 dyslexia」という診断がされております。

ここから推して、コンティンする母性的‘皮膚’の内化において、抑圧された無意識の失敗が字、語、文章間の関係性を正確に把握する能力に影響を及ぼしたとはいえないかといった疑問が浮上します。すなわち、それらは言うなれば「意味の物理的‘皮膚’」ということになるわけですから…。彼は児童期をとおして、度々説明のつかない体調不良を訴える傾向がありました。疼いたり痛んだり、そして疲労感だったりです。それは、早期に心理的な苦痛を表出しそしてコンティンするといったことに身体を活用していたことが、生涯を通して心身症的不調を訴えがちになるということを示しているとも考えられましよう(McDougall,1985)。その後の彼の発達で興味をそそられる側面というのは、彼の依然として続く‘傷つきやすさ vulnerability’であります。つまりは彼の羞恥心、読字障害、彼のいじめられる性癖、そして彼の身体面での訴えであります。こうしたことを「二次的皮膚」形成の維持といった観点からはどのように考えたらいいのでしょうか？彼によって経験され、そして彼によって自らの身体に引き起こされた残虐性の名残りともいっていいのでしょうか？成長した彼はどうかや‘薄く痩せた皮膚’の子どもに見えます。がっちりした厚い皮膚では全然ありません。「脆弱な内的核 fragile inner core」が明らかであり、覆い隠せないようです。たぶん彼が経験したところの残虐性、そしてまたそれはその後彼が自らのからだに引き起こしたものでもあります、それが隠された場所にあり、もしくは‘からだに停滞してある’(Coltart,1986)とも考えられます。それはいずれ彼が成長した時点で顕在化されるのを待つより外無いとも言えましよう。或いはそれとも違って、むしろ彼の対象に対しての‘過剰にやさしげな結託 an over-tender alliance’が表立ってゆくということも考えられなくないでしょう(※原註3)。

結論

この論文では、その起点として‘皮膚機能’を殊の外優先的に重要視するピックの主張を取り上げました。われわれはここで或る母子カップルの観察を例証として、或る幼子が、その心的苦痛やら母親の‘プライマルな皮膚機能’の失敗を味わうといった無意識の経験を、表出したり、コンティンしたり、そしてコントロールするうえでも、どのようにさまざまに‘皮膚’を使っていたかを語ってまいりました。われわれがここで描写してきた事柄のなかには倒錯的ともいえるものがあります。それにも関わらずわれわれは、その‘皮膚’を使うことを通して、彼自身の中にある極めて重要かつ創造的な部分が自ずから促進されていったものと考えております。即ち‘生き残る手立て a way to survive’を模索するといった営みであります。言い換えれば、‘生との繋がりを保ち続けること an engagement with life’でもあり、われわれは至って明瞭にそれを10年後の彼のなかに見ることができたといえていいでしょう。

われわれはまた、母子間の交流の繰返されるパターンの詳細を追跡し、それが時を経て一つの‘図柄 a picture’となってゆくことの重要性に興味を覚え、それを立証してきたわけであります。そうしたパターンは、誕生の瞬間から心身において堅固に創造されてゆくといった可能性を示しております。ピックはその論文(1964)で、乳幼児観察が精神分析のトレーニングにおいてどのように重要であるかということについて、下記のとおり、特に此の点を強調しているのであります。

ここで私が強調しておきたいと思う点は、それぞれ個々の母子カップルについて継続して観察することの重要性であります。セミナーでの経験から申しまして、或る一つの観察において一見して‘パターン’と思われるものが浮き彫りになってきているように見えたとしても、それが同じ、もしくはそれに似た状況においてさらにその後の観察の中で何度も繰り返される場合に限って意義あるものとして認められていいことになるわけなのです。そこそこかなりの期間そうした観察し得るものの詳細に全神経を傾注してまいりますと、研修生にとって‘パターン’を見極めるだけではなく、その‘パターン’がどう変化してゆくかを見定める機会をも与えられることになります。観察者は、母子カップルが互いに馴化し、適応し合うといった変化やら、そして彼らの関係性において深い感銘を覚えるような成長および発達への能力をもやがて認知してゆくことになりましょう。すなわち、満足的ともいえるような母親と赤ちゃんとの関係性に伴うところの互いが互いを活用し合い、発達してゆく能力と柔軟性であります。〔訳註；【乳幼児観察への覚え書き】(1964)P.11 参照のこと。〕

※原註1；Britton は次のように語っております。＜確かに、私の境界例の患者との経験から申しますと、分析において恰も分析家と患者という二人には唯一つの‘皮膚’しかないかのように思われる時期を通過することがあります。そうした場合には、下手すればどっかが生きたまま皮を剥がれるといった目に遭うような危険を冒すことが懸念されるわけであります＞(Britton,R.(1999).P.24)。

※原註2；このことは、倒錯的な心の状態の発達への前駆的的症状と見做してもいいでしょう。それは成人患者において、‘性愛化 sexualization’がリアルな対象関係性(対象からの分離を含む)からの防衛として使われるといったことになるわけであります。(参照；Freud,1910;Joseph.B.1994.)

※原註3；心身症的兆候について特別関心を覚えますことは・・・その恐るべき‘粗暴なけだもの’が目下のところ姿を現すには至っていなくとも、そのからだの中に密かに潜伏しているということであります。・・・大概のところ、それは接近不能のように見受けられわけであります。そして我々は、その心の部分がそのからだの中の‘精神病的な地帯’に止まっているということに気づかされるのであります。(Coltanrt,1986,p.198.)

(訳出；2015.09.10)

※原典；The skin in early object relations revived.

by Judith Jackson & Eleanor Nowers.

In :Surviving Space. Papers on infant observation

edited by Andrew Briggs. (2002). Karnac.

※参考文献

- Anzieu,D.(1989).The Skin Ego. London: Yale.
 (「皮膚-自我」 デイディエ・アンジュー著. 福田素子訳. 言叢社. 1993.)
- Bick,E.(1964).Notes on infant observation in psycho-analytic training .
 International Journal of Psycho-Analysis,45.
- Bick,E.(1968).The experience of the skin in early object relations.
 International Journal of Psycho-Analysis,49.
- Bion,W.R.(1962a).Learning from Experience. London: Heinemann.
 Reprinted London: Karnac,1984.
- Bion,W.R.(1962b).A theory of thinking. In: Second Thoughts
 :Selected Papers on Psycho-Analysis.London:Heinemann.1967.
- Britton,R.(1999).Discussion of Domenico and Giovanna Di Ceglie's paper:
 "Thoughts on Structure and Function of the Body in Symbol Formation."
 Bulletin of the British Psychoanalytical Society,35(7).
- Coltart,N.(1986).“Slouching toward Bethlehem”or
 thinking the unthinkable in psychoanalysis.
 In: G.Kohen (Ed.)、 The British School of Psychoanalysis:
 The Independent Tradition. London:Free Association Books.
- Ferenczi,S.(1933).Confusion of tongues between adults and the child.
 In:Final Contribution to the Problems and Methods of Psycho-Analysis.
 London Hogarth Press,1955.(森茂起・大塚紳士郎・長野真奈訳;「精神
 分析への最後の貢献」～フェレンツイ後期著作集～ 2007. 岩崎学術出版社.;
 ;(1933)「大人と子ども間の言葉の混乱—やさしさの言葉と情熱の言葉」.)
- Freud,S.(1910).The psychoanalytical view of psychogenic disturbance of vision.S.E.,11.
- Freud,S.(1923).The ego and the Ide.S.E.,18.
- Joseph,B.(1994).“Where there is no vision.” From sexualization to sexuality.
 Bulletin of the British Psychoanalytical Society,30(10).
- Lecourt,E.(1990).The musical envelope. In: D.Anzieu (Ed.),
 Psychic Envelopes. London: Karnac.
- McDougall,J.(1975). Psychosomatic states,anxiety neurosis and hysteria. In:Theaters of
 the mind : Illusion and Truth on the Psychoanalytic Stage.New York: Basic Books.
- Pines,D.(1980). Skin communication : early skin disorders and their effect on transference
 and countertransference. International Journal of Psycho-Analysis, 61:315-322.
- Segal,H.(1957). Notes on symbol formation. In: E.B.Spillius (Ed.),
 Melanie Klein Today: Vol.1. London: Routledge , 1988.
